

# 九州大学宮崎演習林におけるニホンジカの生息調査結果

長慶一郎<sup>1</sup>, 鍛冶清弘<sup>1</sup>, 山内康平<sup>1</sup>, 緒方健人<sup>1</sup>, 佐々木寛和<sup>1</sup>

<sup>1</sup>九州大学演習林,

## 1. はじめに

近年, 全国的にニホンジカ *Cervus nippon* (以下 シカ) の個体数増加に伴う森林の顕著な変化が観察されている (植生学会企画委員会 2011). 九州大学宮崎演習林 (以下 演習林) においてもシカによる人工林での食害 (櫻木ら, 1999) や天然林においても 30 年ほど前からスズタケをはじめとする下層植生への食害が顕著になっている (猿木ら, 2004; 村田ら, 2009). 演習林では団地間でシカによる下層植生の食害の時期が異なる. 三方岳団地では 10 年前からスズタケ群落がすでに消滅していたが, 津野岳団地では 10 年前には広い範囲で残っていた. しかし津野岳団地においてこの 10 年で急速にスズタケ群落が衰退した (長ら, 2014). 本発表では, 植生被害の顕在化した時期が異なる二つの団地において, 2006 年から 2015 年にかけてのシカ生息密度の推移がどのように異なるかを調査した.

## 2. 調査地と方法

調査地は三方岳団地内の林道 (探照面積は 0.441km<sup>2</sup>) と津野岳団地内の林道 (探照面積は 2006 年から 0.108km<sup>2</sup>, 2011 年から 0.168 km<sup>2</sup>) である. 夜間に林道を車両で低速走行しながら, 車両の荷台からスポットライトを照射することで目撃されるシカの姿および目の反射により個体数を調べた. 可視範囲の測定により, 探照面積を算出した. 各調査日の個体数を探照面積で除し, これらの平均から相対的な生息密度指標値を得た. 2006 年 5 月~2015 年 11 月までの年 2 回, 春 (5 月)・秋 (11 月) にそれぞれ 3 日間の調査を行った (図-1).

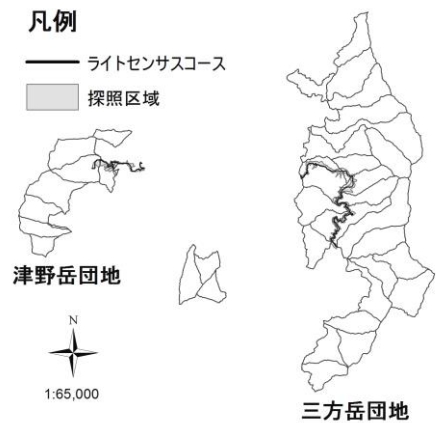


図-1 調査位置図

## 3. 結果と考察

津野岳団地では 2006 年から 2007 年において三方岳団地に比べて低い生息密度を示していたが, 2008 年から急激に増加し, その後, 一旦は低下したがおおむね三方岳団地よりも高かった. 一方, 三方岳団地の生息密度は比較的一定であった (図-2). 津野岳団地において, この 10 年間で三方岳団地よりも急激な増加と高い密度での推移がみられたことは, 三方岳団地では観測開始時よりスズタケ群落が消滅していたのに対し, 津野岳団地では, 繁茂していたスズタケ群落がこの 10 年間で衰退してきている事実と合致する. 一方, 三方岳団地では 2003 年時点ですでにスズタケ群落が衰退していることから, 生息密度が安定していることが考えられた. 春の生息密度が両団地とも秋のそれより高かった. また津野岳団地の方が季節間の変動が大きかった (図-3). 春の生息密度が高かったことの要因としては, 出産時期や繁殖時期との関係が考えられた.

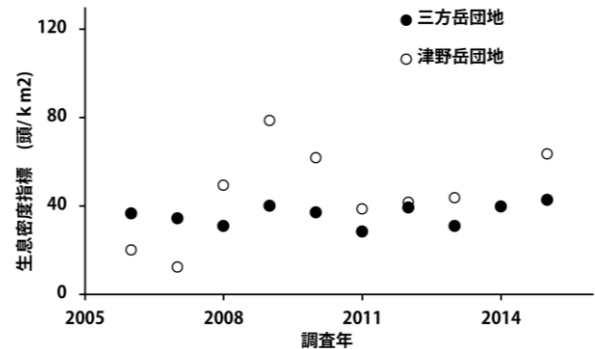


図-2 年別団地別の生息密度指標の推移

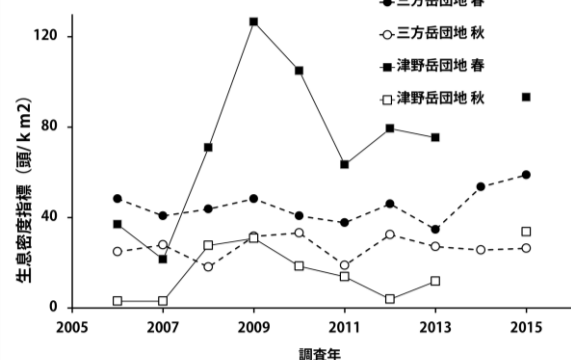


図-3 年別団地別季節別の生息密度指標の推移